



2014 (H26)年度後半期
博士学位取得



2015(H27)年度前半期博士学位取得

目次

巻頭辞	2
2014年度後半期及び2015年度前半期学位授与式	3
2015年度新規科目担当者	4
2015年度科学研究費新規プロジェクト	4

社会文化科学研究科修了生による出版物	5
人文社会科学研究科特別研究員による出版物	6
博士後期課程大学院生業績	6

巻 頭 辞

今年もまた修了式を迎える時期になりました。常に若い息吹に触れ、刺激を受けられるのが教員をやっていて最大の役得だと思いますが、その代わり巣立っていく学生たちの背中を毎年見せられ、寂しい思いをさせられるのも教員として耐えねばならない宿命であります。

この効率化とグローバル化を至上とする時代、あからさまに人文社会科学にとって逆風の時代に、あえて立ち止まって文化や社会制度・社会現象を根源から問い、本質や現状の問題点やあるべき姿や改善の方策をじっくり問おうとし、本研究科に集まり、成果を上げて世界に散っていく修了生たちを、私は本当に素晴らしい人々だと思います。それに理解を示したご家族にも頭が下がります。

人文社会科学の知見は、よりよい社会を作るために不可欠なものです。ただし即効性がなく、成果が形で見えにくいので、今のような時代には厄介者扱いをされます。こんな時代に志を持って人文社会科学を深める道を選んだ修了生の皆さんが、その良い意味での「頑固さ」を貫き、「そもそも」を問い、「あるべき」を求め、ざわつきまどう社会の中で、羅針盤のような存在になることを願っています。

修了生の皆さんの存在そのものが、本研究科の存在意義なのですから。

平成28年3月25日 修了式の日

千葉大学大学院人文社会科学研究科 研究科長

石井正人

2015 (H26) 年度後半期学位授与式

2015年3月25日、文学部棟2階203講義室において学位授与式が行われ、以下に掲載する1名の方が論文提出により学位（博士）を、5名の方が人文社会科学研究科博士後期課程を修了して学位（博士）を（表紙写真）、52名の方が人文社会科学研究科博士前期課程を修了して学位（修士）を（右写真）取得されました。



2014年度後半期論文による学位取得者（2015年3月）

氏名	博士論文題名	取得学位
佐藤みゆき	ヴァレリー・ラルポー研究—ブルボネ地方への帰郷	博士(文学)

2014年度後半期人文社会科学研究科後期課程修了者（2015年3月）

氏名	博士論文題名	取得学位
吉沢文武	死と生の形而上学—存在と非存在をめぐる二つの直観について	博士(文学)
SAJEEWANI DISSANAYAK	多言語国家スリランカの言語使用状況—シンハラ語話者とタミル語話者のコードスイッチング—	博士(文学)
孟克巴圖	内モンゴルにおけるモンゴル民族教育に関する社会学的研究	博士(文学)
馮英華	村上春樹文学における「想起の空間」—追憶・歴史・中国	博士(文学)
金子洋一	現代人の肩こりの特徴と対策についての考察—将来を見据えた教育・指導の必要性について—	博士(学術)

人文社会科学研究科博士前期課程学位（修士）取得者（2015年3月）

一牛ゆかり	五味玲子	重永 楽	城 香代子	鈴木奈生	中山佳奈	野口陽子
菊島さとみ	佐々木理奈	孫 玲	藤田紗樹	村上浩代	米城百合子	孫 美那
立川 陽介	RATTANBUREE NANTIYA	橘 美土理	土居健次朗	三澤翔太	渡邊敬介	石井和孝
弓場真嗣	澤田慎一郎	長谷川南	藤本 弘之	JIN XIN	崔 栄	崔 馨月
祝 浩洋	花澤 仲	米内 良太	廣田千恵子	佐野匡平	阿久津侑里	佐藤雅子
新島亮	吉川佳見	傅 冬昭	高 銀貞	吉村詩子	杉山眞弓	土嶋秀介
森田友理	王 前陽	岡崎 聡	清水 求	徳永 華苗	劉 琳	浜中吾郎
康 美淑	蔣 若楠	ZHENG DI				

2015 (H27) 年度前半期学位授与式

2015年9月28日、人文社会科学系総合研究棟2階マルチメディア会議室で学位授与式が行われ、以下に掲載する1名の方が論文提出により学位（博士）を、1名の方が人文社会科学研究科博士後期課程を修了して学位（博士）を（表紙写真）、2名の方が人文社会科学研究科博士前期課程を修了して学位（修士）（右写真）を取得されました。



2015年度前半期論文による学位取得者（2015年9月）

氏名	博士論文題名	取得学位
古澤美映	実験動物に関する法と倫理—動物の権利論を超えて—	博士(学術)

2015年度前半期人文社会科学研究科博士後期課程修了者（2015年9月）

氏 名	論文表題	取得学位
鄒 晓依	長期滞在中国人の言語レパートリーの研究—接触場面会話における動詞使用と言語管理を中心に—	博士(学術)

2015年度前半期人文社会科学研究科博士前期課程修了者（2015年9月）

欠ヶ端和也	SAMBUU ALTANTARIA
-------	-------------------

2015 (H27) 年度新規科目担当者

2015年度人文社会科学部研究科新規科目担当者は以下の通りです。

課程	専攻	研究教育分野	職名	氏名	科目名
博士前期課程	地域文化形成	表象・文化情報	助教	阿部昭典	物質文化論 同演習
博士前期課程	公共研究	公共思想制度研究	准教授	佐藤健太郎	日本政治史 同演習
博士前期課程	公共研究	公共思想制度研究	准教授	渡辺千尋	西洋経済史 同演習
博士前期課程	公共研究	共生社会基盤	准教授	秋葉剛史	言語分析論 同演習
博士前期課程	社会科学研究	経済理論・政策学	講師	鈴木慶春	ミクロ経済学I ミクロ経済学II
博士前期課程	社会科学研究	経済理論・政策学	講師	阪本浩章	環境経済学 同演習
博士前期課程	社会科学研究	経済理論・政策学	講師	川久保友超	ベイズ統計学
博士前期課程	総合文化研究	比較文化	准教授	山本裕子	アメリカ文学論 同演習
博士前期課程	総合文化研究	人間行動	助教	吉岡洋介	サービス化社会論 同演習
博士前期課程	先端経営科学	先端経営科学	准教授	横尾陽道	経営戦略論
博士後期課程	公共研究	公共哲学	准教授	高橋 絵里香	医療人類学

2015 (H27) 年度科学研究費新規プロジェクト

2015年度の新規採択は以下の通りです。1)代表者名 2)2015年度予算額(単位は円。括弧内は間接経費を内数で示す。)

専任教員

基盤研究(C)一般 「コミュニティアニズムと幸福研究——政治経済学における理論的・実証的展開」

1)小林正弥教授 2)1,300,000 (390,000)

基盤研究(C)一般 「近世～近代における風土記研究と郷土意識に関する研究」

1)兼岡理恵准教授 2)800,000 (240,000)

基盤研究(C)一般

「南アジア系移民企業家と移民システムのエスニック集団別特徴に関する社会学的研究」

1)福田友子助教 2)900,000 (270,000)

若手研究(B) 「前近代日本における理念的鎌倉幕府像の形成と展開——その言説史的再構成——」

1)山口道弘准教授 2)1,200,000 (360,000)

特別研究員

若手研究(B) 「福永武彦における文化史的位相の研究」 1)西田 一豊 2)700,000 (210,000)

若手研究(B) 「情報化社会に最適化された自己情報コントロール理論の構築」

1)壁谷 彰慶 2)500,000 (150,000)

兼任教員

基盤研究(C) 『漢書』芸文志の動態的研究(内山直樹文学部教授)

基盤研究(C) 写真家ウォーカー・エヴァンスとモダニスト文学者との学際的比較研究

(山本裕子文学部准教授)

基盤研究(C) 現代ロシア文化における文学と視覚芸術の相互的影響の解明(鴻野わか菜文学部准教授)

基盤研究(C) 地方自治体における人類学的調査を通じた日本における人口問題の多角的分析

(小谷真吾文学部) 准教授

基盤研究(C) 国連体制における「要請による干渉」の機能変化——二重機能論からのアプローチ——

(藤澤 巖法政経学部准教授)

基盤研究(C) メコン地域主義の新たな位相——レジーム・コンジェスションと「下」からの越境的公共圏

(五十嵐誠一法政経学部准教授)

基盤研究(C) 来店行動・店舗内購買行動研究の体系化に関する基礎研究(佐藤栄作法政経学部教授)

基盤研究(C) 本人が「当事者」として「認知症」とされる体験を語ることの意味をめぐる探索的研究

(出口泰靖文学部准教授)

基盤研究(C) ローカルにおける非営利セクターの構築過程と領域特定型中間支援組織の役割

(清水洋行文学部准教授)

基盤研究(C) 仲間の排斥・攻撃行動の許容における仲介・調整プロセスの検討(磯部智加衣文学部准教授)

挑戦的萌芽研究 自動走行システム自動車の導入に係る刑事法的課題(石井徹哉大学院専門法務研究科教授)

挑戦的萌芽研究 海外出稼ぎ労働と労働輸出国の人的資本蓄積：ネパール児童への「健康投資」

(橘 永久法政経学部教授)

若手研究(B) 戦後アメリカにおける保守派の社会運動とカントリー音楽の相関(舘 美貴子文学部准教授)

若手研究(B) 集合的利益・拡散的利益を巡る法制度設計—消費者・環境・情報法制の架橋

(横田明美法政経学部准教授)

若手研究(B) 物的担保制度における過剰をめぐる法理の考察(大澤慎太郎法政経学部准教授)

若手研究(B) 誘惑と自制の意思決定を考慮した貨幣的モデルの構築(平口 良司法政経学部准教授)

若手研究(B) 様々な市場構造が技術移転交渉に与える影響について(岸本 信法政経学部准教授)

若手研究(B) 多様な形態のデータに対する分位点回帰モデルと内生性についてのベイズ解析

(小林弦矢法政経学部講師)

若手研究(B) パネルデータを用いた初期キャリアの計量分析-大学生の人間行為力・機会・制度-

(吉岡洋介文学部助教)

研究活動スタート支援 真理の機能主義に関する統合的研究の基礎(秋葉剛史文学部准教授)

2015年1～12月

社会文化科学研究科修了生による出版物

中村隆文 (社会文化科学研究科修了生)

不合理性の哲学—利己的なわれわれはなぜ協調できるのか—(みすず書房, 2015年12月, ISBN978-4-622-07962-0C1010)

利益、罰、自由、平等……われわれが日頃あたりまえに合理的な価値基準に基づいていると考えている物事は、本当に合理的なのだろうか？ 合理的だからこそわかり合えていないということはあるのだろうか？ そして、人間のもつ「不合理さ」は不必要なものなのだろうか？本書はデイヴィッド・ヒュームによる理性批判を出発点にロールズ、ハイエク、ゴティエ、サンデルら現代の思想家たちが人間の合理性、そして不合理性をどのように捉えてきたのかを読み解いてゆく。さらに、心理学や行動経済学のユニークな実験から得られた知見を考察し、日常にひそむ「合理性の限界」と「不合理性の可能性」を探求する。われわれはどのように自分や他人の「不合理さ」を認め、協調していくことができるのだろうか——読者とともに考え、哲学する一冊。

はじめに

第 I 部 社会的協調

第1章 コンヴェンション分析

1 ボートでのオール漕ぎ

2 穀物の刈り入れ

3 共有放牧地の排水

第2章 合理性から協調は引き出せるか？

1 ゲーム理論的分析

2 ロールズの『正義論』と無知のヴェール

3 ニュートラルな合理性の行き詰まり

——ゴティエの契約論

第3章 応報的感情

1 復讐には意味がない？

2 罰の在り方

3 罰よりモラル？

——合理的な不合理性

第 II 部 合理的な選択

第4章 理性とルール

1 設計主義の限界

2 社会進化論的リバタリアニズムと

ハイエク主義との違い

3 情報の限界、信頼の限界

第5章 「幅」のある規範的合理性

1 行為の「理由」と「原因」の区別

2 ヒューム主義 vs. 反ヒューム主義

3 計画、ポリシー、「幅」のある

規範的合理性

第6章 不合理な交流から合理的な共存へ

1 不合理な利己性

2 リスク回避的協調

3 共感の拡大と限界

第 III 部 自由な社会

第7章 不自由な責任主体

1 「合理的」だから「自由」であるのか？

2 理性と責任

3 道徳的な証拠

4 愚行の自由

第8章 膨張する自由、変容する社会

1 自由の膨張

2 社会の変形

3 「物語」の剥奪

第9章 不合理性の哲学

1 擬制としての「自由」

2 不合理な「信頼」

3 「合理的」という看板

あとがき

文献

不合理性の哲学

利己的なわれわれは
なぜ協調できるのか

中村隆文

みすず書房

2015年1～12月
人文社会科学研究科特別研究員による出版物

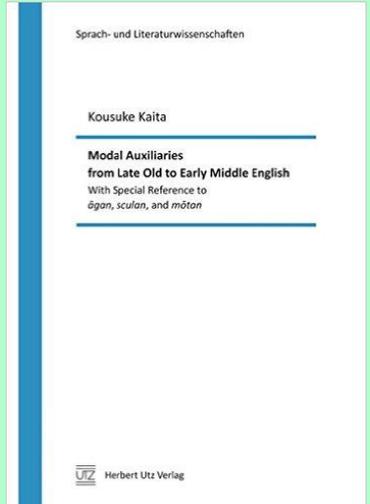
海田皓介（人文社会科学研究科修士）

Kaita, Kousuke.

Modal Auxiliaries from Late Old to Early Middle English – with Special Reference to āgan, sculan, and mōtan. München: Herbert Utz. (2015年4月)

拙著はドイツ、ミュンヘン大学の言語学博士課程在学中に執筆した学位論文に加筆・修正を行い出版したものである。現代英語にて「義務」（「～するべきである」）を意味する法助動詞 *ought to*, *should*, *must* はなぜ過去形でありながら現在の意味を表すのか。なぜ *ought* には *to* が伴うのか。拙著は英語の歴史に目を向けてこれらの問いに答えを出そうとするものである。

英語史は古英語（700-1100年）・中英語（1100-1500年）・近代/現代英語（1500年-）に分類されるが、拙著は *ought to*, *should*, *must* の形成に重要な古英語・中英語の過渡期（10-13世紀）に焦点を当てた。*ought to* は「所有」（「～を持っている」）を表す古英語 *āgan* に不定詞標識の *to* が付随した形式から、*should* は (*shall* とともに) 「義務」を表す *sculan* から、そして *must* は「許可」（～してもよい）を意味する *mōtan* から発達した。宗教散文などの一次文献の詳細な読み取りの他、法助動詞の表すモダリティのレビュー、そして英語と他のゲルマン諸語の比較といった観点からこれらの発達過程を議論する。



人文社会科学研究科博士後期課程大学院生業績（2015年1月～12月）

槇野沙央理（後期課程公共研究専攻）

論文

Saori MAKINO, "Language-Games or Misleading Expedients for Philosophical Therapy", *Contributions to the 38th Wittgenstein Symposium, Kirchberg am Wechsel*, Austrian Wittgenstein Society, August 2015

猪岡萌菜（前期課程地域文化形成専攻）

メディア掲載

新聞

・常陸名所図屏風の研究で2015年6月茨城新聞、2015年6月、10月胆江日日新聞、7月読売新聞茨城版、11月岩手日報にとりあげられる。

テレビ

・2015年7月放送 NHK茨城地域ニュース「いば6」内特集「新発見！常陸名所図屏風の謎に迫る！」でとりあげられる。